

令和 5 年 5 月 12 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K14171

研究課題名（和文）うつ病罹患者の社会的受容を促進する教育の開発・効果評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of educational programs that promote social inclusion of people with depression

研究代表者

榎原 潤（Kashihara, Jun）

東洋大学・社会学部・助教

研究者番号：10788516

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：うつ病罹患者の社会的受容を促す教育コンテンツを精緻化するため、複数の基礎研究に取り組んだ。具体的には、うつ病罹患者を援助する側の心理に着目し、援助行動にまつわる利益・コスト感としてどのような内容のものがあるかを明らかにし、それらの利益・コスト感がどのように相互作用し合っているかをネットワーク分析という手法で明らかにした。また、うつ病という病理の複雑性・個別性に迫るための心理ネットワークアプローチに着目し、その理論や方法論を文献レビューで整理した。その他、メルボルン大学との共同研究として、うつ病等の精神疾患に対する偏見をメディア報道によってどのように緩和されるかを実験で検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでのうつ病教育は、「正しい知識とスキルを学べば、誰でも進んで身の周りのうつ病罹患者を援助できるようになるはずだ」という前提に立っていた。これに対し、本研究では、援助が大事だとわかっても踏み切れない心の葛藤に着目し、その様相を明らかにした。また、うつ病の偏見を緩和しようとする際に、メディア報道や教育の内容の選び方によっては十分な効果が得られないことを示した。さらに、そもそも「うつ病」という障害が複雑で多様なものであり、研究アプローチの切り替えが必要であることを示した。これらの知見は、従来のうつ病研究の前提を見直すものであり、社会に向けた教育のあり方を考え直すきっかけとなるものといえる。

研究成果の概要（英文）：Several empirical studies were conducted to elaborate educational contents to promote social inclusion of people with depression. First and second studies explored contents of perceived costs and benefits of helping people with depression and identified network structures of those interplaying components. Third study was a literature review of psychological network approach to explore complexity and heterogeneity of depression. Fourth experimental study was conducted in collaboration with the University of Melbourne to investigate how media reports could mitigate stigma of mental illness, including depression.

研究分野：臨床心理学

キーワード：うつ病 社会的受容 教育 偏見 サポート行動

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

うつ病罹患者の社会的受容を促す教育コンテンツを精緻化するため、大きく分けて 4 件の基礎研究に取り組んだ。以下、研究ごとに背景・目的・方法・成果を説明する。

1. 研究開始当初の背景

(1) 「一般人口を対象とした教育プログラムで、うつ病などの精神疾患の罹患者をサポートするための知識やスキルを底上げしていく」という発想の教育プログラムが世界的な広がりを見せている（レビューとして、Morgan et al., 2018）。しかし、そうした教育プログラムの参加者を対象とした質的インタビュー調査（Rossetto et al., 2018）では、「いざ現実場面でうつ病らしき人を見かけても、心理的コストが気にかかりサポート行動を実践できなかった」という体験が報告されている。「うつ病罹患者に対するサポート行動を実践する際の、心理的コストをはじめとした動機づけ要因」というのは従来の研究で見過ごされており、動機づけ要因として具体的にどのような内容のものが存在するのかさえ明らかになっていなかった。

(2) (1) で指摘した課題の延長線上にある問題として、「様々な動機づけ要因同士が、どのような相互作用を成しているのか」「その中でも、中核的な役割を果たしている動機づけ要因とは何か」といったことが明らかになっていなかった。

(3) 従来のうつ病教育は、「典型的な」うつ病像を説明し、「正しい」医学的知識を啓発するという発想に基づいていた。しかし、近年ではうつ病像そのものの多様性が指摘されており（Fried & Nesse, 2015）、心理ネットワークアプローチという新たな手法を駆使してうつ病など精神疾患の多様性や複雑性に迫ることの重要性が指摘されるようになった（Borsboom, 2008）。ただし、この心理ネットワークアプローチについて日本では文献の整理が進んでおらず、「理論と方法論の両面から見て、アプローチの要点はどこにあり、今後の臨床心理学研究に対してどのような示唆を投げかけるものなのか」ということがはっきりしていなかった。

(4) うつ病な精神疾患に対する偏見には、メディア報道が影響する可能性が指摘されてきた。ただし、質問紙などで表明される顕在的偏見と比べて、瞬間的な反応やふとした判断に反映される潜在的偏見については、メディア報道がどのように影響するのかが明らかでなかった。

2. 研究の目的

(1) 「うつ病罹患者に対するサポート行動を実践する際の、心理的コストをはじめとした動機づけ要因」としてどのような内容のものがあるのかを明らかにする。

(2) (1) の研究で特定された様々な動機づけ要因同士がどのようなネットワーク構造を成しているのか、またその中で中心的な役割を果たしているものはどれかを明らかにする。

(3) 心理ネットワークアプローチに関する先行研究を整理し、アプローチの要点や今後の日本の臨床心理学研究にもたらす示唆を整理する。

(4) 仮想のメディア報道記事を用いた実験を行い、さまざまなタイプのメッセージが精神疾患に対する顕在的偏見と潜在的偏見にどのように影響するのかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 日本人大学生 56 名に対して、友人がうつ病の症状を呈している場面を想定させるシナリオを提示し、その友人を「援助する / しない」ことについてどのような「利益 / コスト」を感じるかを考え、考えた内容を自由記述するように求めた。そうして得られた自由記述の内容を KJ 法（川喜田, 1967）で大小さまざまなカテゴリーに分類した。

(2) 日本人大学生 297 名に対して、(1) と同様のシナリオを提示した。その上で、(1) の検討から得られた主要なカテゴリーの内容を反映した質問項目群を研究参加者に提示し、「うつ病の友人を目の前にしたとき、質問項目群に記された利益 / コストを感じるものがどの程度ありそうか」ということを 7 段階で評定するように求めた。こうして得られた評定値からなる横断データに対し、ガウシアン・グラフィカルモデル（Epskamp et al., 2012）を適用し、利益・コスト感のネットワーク構造を推定した。

(3) Borsboom (2008) の論文より後に出版された英語論文を収集し、心理ネットワークアプローチの研究状況を整理した。そして、「心理療法の効果や効率性の向上にいかにつなげていくか」「臨床心理学の研究と実践を豊かにしていくべく、確かな理論の構築をいかに促していくか」という 2 つの観点を軸に、今後の展望をまとめた。

(4) イギリスやアメリカなどの国に住む成人 838 名を対象に、オンライン調査会社のプラットフォームを通じてデータ収集を行った。研究参加者は、ランダムに 2 群に分けられ、「精神疾患と暴力の関連性」と「精神疾患に対する偏見を和らげるメッセージ」のいずれかを強調した仮想のニュース映像を視聴した。その上で、顕在的偏見を測定するための質問項目群に回答し、潜在的偏見を測定するための簡略版潜在連合テスト（Sriram & Greenwald, 2009）と呼ばれるコンピュータ課題を実施した。

4. 研究成果

(1) うつ病の友人を「援助することのコスト」について 8 種類の大カテゴリーが、「援助するこ

との利益」について7種類の大カテゴリーが、「援助しないことのコスト」について8種類の大カテゴリーが、「援助しないことの利益」について7種類の大カテゴリーがそれぞれ見いだされた。また、Cohenの κ 係数により、それぞれのカテゴリー分類については十分な信頼性があることが示された。この結果をまとめた論文は、査読付き英文誌 *International Journal of Mental Health Systems* に掲載された。

(2) うつ病の友人を「援助する / しない」ことの「利益 / コスト」という、 $2 \times 2 = 4$ 種類のネットワーク構造を推定し、その視覚化を行った。図1には、分析結果の一部として、「援助することのコスト」のネットワーク構造を示した。中心性指標を検討することで、4種類のネットワークそれぞれにおいて中心的な役割を果たしている利益 / コスト感を特定した。また、4種類のネットワークの特徴量を比較し、「援助することのコスト」および「援助しないことの利益」のネットワークが他よりも密な構造になっていることを示した。このことから、「援助しない理由を一度探し始めてしまうと、連鎖反応で次々と援助しない理由が頭の中で浮かび上がってしまい、結果的に援助行動を実行する見込みが下がってしまう」というメカニズムが存在するというを推察した。この結果をまとめた論文は、査読付き英文誌 *Japanese Psychological Research* に掲載された。

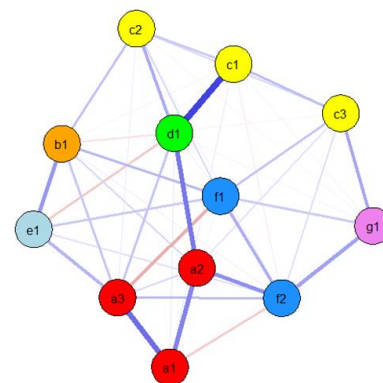


図1. うつ病の友人を援助する際のコスト感のネットワーク構造

(3) 先行研究を整理した結果、レビュー論文2点を執筆することができた。1点目の論文では、認知行動療法をはじめとした心理療法において、先行研究から見出された「平均的な病理のネットワーク構造」や、患者本人から測定したデータに基づいて推定した「個人に特有のネットワーク構造」を可視化して患者に提示すれば、治療上のコミュニケーションが大きく促進されるなどの展望を示した。2点目の論文では、心理ネットワークアプローチの最も核となる発想は、「多様な症状の背後に疾病概念を想定して病理を理解したつもりになる (図2の左パネル) のではなく、症状同士が織りなす複雑な相互作用を一種のネットワークとみなして理解する (図2の右パネル)」というものであることを示した。そのため、データ分析手法のみを機械的に活用するのではなく、理論と分析の対応関係をよく理解し、「理論から導かれる予測」と「分析結果によって駆動される理論の改善」という両者の循環を起こしていくことが大事になるということを示した。これらの成果は、査読付き国内誌『認知行動療法研究』および『心理学評論』に掲載された。

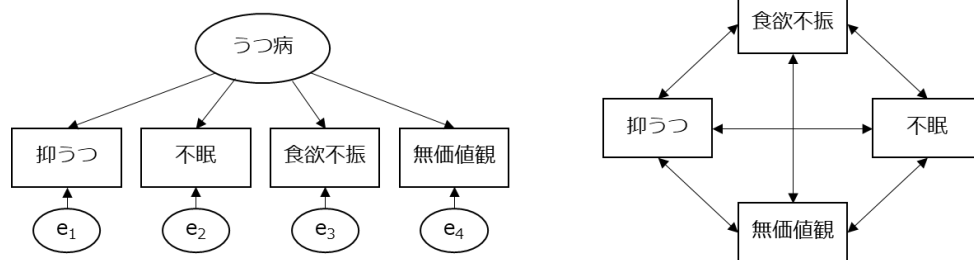


図2. うつ病の潜在疾患モデル (左) とネットワークモデル (右)

(4) 実験の結果、①「精神疾患に対する偏見を和らげるメッセージ」を強調したニュース映像を視聴した群では、もう一方の群と比べて顕在的の偏見が大きく低減したものの、②いずれの群でも潜在的偏見に有意な低減は見られなかった、という2点が確認された。このことから、ニュース映像に特定のメッセージを盛り込むというやり方には、偏見低減の手法として限界があるということが示唆された。この結果をまとめた論文は、査読付き英文誌 *Stigma and Health* に掲載された。

<引用文献>

Borsboom, D. (2008). Psychometric perspectives on diagnostic systems. *Journal of Clinical Psychology, 64*(9), 1089–1108.

Epskamp, S., Cramer, A. O. J., Waldorp, L. J., Schmittmann, V. D., & Borsboom, D. (2012). *qgraph*: Network visualizations of relationships in psychometric data. *Journal of Statistical Software, 48*(4), 1–18.

Fried, E. I., & Nesse, R. M. (2015). Depression is not a consistent syndrome: An investigation of unique symptom patterns in the STAR*D study. *Journal of Affective Disorders, 172*, 96–102.

川喜田 二郎 (1967). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社

Morgan, A. J., Ross, A., & Reavley, N. J. (2018). Systematic review and meta-analysis of Mental Health

First Aid training: Effects on knowledge, stigma, and helping behaviour. *PLOS ONE*, 13(5), e0197102.

Rossetto, A., Jorm, A. F., & Reavley, N. J. (2018). Developing a model of help giving towards people with a mental health problem: A qualitative study of mental health first aid participants. *International Journal of Mental Health Systems*, 12, 48.

Sriram, N., & Greenwald, A. G. (2009). The Brief Implicit Association Test. *Experimental Psychology*, 56(4), 283-294.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Morgan, A. J., Ross, A. M., Wake, A., Jorm, A. F., Kashihara, J., & Reavley, N. J.	4. 巻 8
2. 論文標題 Stigmatizing and mitigating elements of a TV news report on violent crime and severe mental illness: An experiment	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Stigma and Health	6. 最初と最後の頁 93-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1037/sah0000358	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 伊藤 正哉・西村 拓一・竹林 由武・榎原 潤・村中 誠司・古徳 純一・菅原 大地・国里 愛彦・重枝 裕子・大井 瞳・豊田 彩花・杉田 創・矢部 魁一・辻 拓将・押山 千秋・青木 俊太郎・二瓶 正登・西村 悟史・中島 俊	4. 巻 62
2. 論文標題 デジタル-人間融合による精神の超高精細ケア：人工知能技術による心理療法の革新へ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 医療の広場	6. 最初と最後の頁 6-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 榎原 潤・伊藤 正哉	4. 巻 48
2. 論文標題 心理ネットワークアプローチがもたらす「臨床革命」 認知行動療法の文脈に基づく展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知行動療法研究	6. 最初と最後の頁 35-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24468/jjbct.20-015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kashihara, J., & Sakamoto, S.	4. 巻 65
2. 論文標題 Identifying the central components of perceived costs and benefits of helping peers with depression: A psychological network analysis using Japanese undergraduate samples	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 112-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12371	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kashihara, J., Takebayashi, Y., Kunisato, Y., & Ito, M.	4. 巻 16
2. 論文標題 Classifying patients with depressive and anxiety disorders according to symptom network structures: A Gaussian graphical mixture model-based clustering	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PLOS ONE	6. 最初と最後の頁 0256902-0256902
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1371/journal.pone.0256902	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎原 潤	4. 巻 64
2. 論文標題 理論構築の観点から紐解く心理ネットワークアプローチの活用上の留意点 松本論文へのリプライ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学評論	6. 最初と最後の頁 204-223
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24602/sjpr.64.2_204	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 榎原 潤	4. 巻 21
2. 論文標題 「プロセスに基づくセラピー」事始め 「エビデンスに基づくセラピー」の先を行く, 臨床心理学の新たな枠組み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 489-492
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 榎原 潤	4. 巻 94
2. 論文標題 自著を語る「うつ病とスティグマの臨床社会心理学 偏見の解消に向けた挑戦」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 心理学ワールド	6. 最初と最後の頁 43-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kashihara, J., & Sakamoto, S.	4. 巻 14
2. 論文標題 Exploring perceived costs and benefits of first aid for youth with depression: A qualitative study of Japanese undergraduates	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Mental Health Systems	6. 最初と最後の頁 34-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s13033-020-00366-7	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 亀山 晶子・榎原 潤・山川 樹・村中 昌紀・坂本 真士	4. 巻 34
2. 論文標題 「新型うつ」の特徴を有する社員は上司・同僚からどのような印象や態度を抱かれやすいか 一般企業の管理職・非管理職を対象としたビネット調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 産業・組織心理学研究	6. 最初と最後の頁 165-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計10件(うち招待講演 0件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Kashihara, J., Takebayashi, Y., Kunisato, Y., Sugawara, D., & Ito, M.
2. 発表標題 Network analysis on the efficacy of the unified protocol for transdiagnostic treatment of emotional disorders: Exploring the effects on the individual symptoms of depression and anxiety
3. 学会等名 2023 International Convention of Psychological Science (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 榎原 潤・竹林 由武・国里 愛彦・伊藤 正哉・菅原 大地
2. 発表標題 認知行動療法によってうつ・不安症状のネットワーク構造は変容するか? 統一プロトコルの臨床試験データの二次解析
3. 学会等名 第22回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榎原 潤・菅原 大地
2. 発表標題 プロセスベースセラピー入門：「新時代の臨床の枠組み」を学ぶ
3. 学会等名 第22回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榎原 潤・菅原 大地・竹林 由武・国里 愛彦・五十嵐 友里・小杉 考司
2. 発表標題 Process-Based Therapyとは何か？ その概要と発展可能性を議論する
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榎原 潤・国里 愛彦・竹林 由武・菅原 大地
2. 発表標題 心理ネットワークアプローチ入門：横断データ解析を中心に
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 伊藤 正哉・西村 拓一・中島 俊・竹林 由武・古徳 純一・村中 誠司・榎原 潤・国里 愛彦・菅原 大地・横谷 謙次
2. 発表標題 デジタル-人間融合による精神の超高精細ケア：多種・大量・精密データ戦略の構築
3. 学会等名 第36回人工知能学会全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 重枝 裕子・西村 拓一・竹林 由武・榎原 潤・村中 誠司・中島 俊・青木 俊太郎・押山 千秋・国里 愛彦・菅原 大地・辻 拓将・大井 瞳・矢部 魁一・杉田 創・加藤 典子・伊藤 正哉
2. 発表標題 認知行動療法と臨床査定で取得される多種データへの人工知能技術の適用：精神状態の識別及び治療アウトカムの予測
3. 学会等名 電子情報通信学会 人工知能と知識処理専門委員会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 榎原 潤・竹林 由武・国里 愛彦・伊藤 正哉
2. 発表標題 うつ病・不安障害の分類可能性と症状ネットワーク構造の検討 Gaussian graphical mixtureモデルに基づく潜在ネットワーク・クラス分析
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 榎原 潤・市川 玲子・徳岡 大・北條 大樹・小杉 考司
2. 発表標題 心理統計の学習方略を議論する 統計とうまくつきあえるユーザーを増やしていくために
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 竹林 由武・国里 愛彦・山本 哲也・北條 大樹・榎原 潤・杉浦 義典
2. 発表標題 認知行動療法研究の新時代を切り開く研究法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第46回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 榎原 潤	4. 発行年 2020年
2. 出版社 金剛出版	5. 総ページ数 274
3. 書名 うつ病とスティグマの臨床社会心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

榎原 潤 (Jun KASHIHARA) のホームページ https://junkashihara.wixsite.com/psychology 榎原 潤 (Jun KASHIHARA) - マイポータル - researchmap https://researchmap.jp/junkashihara note: Jun Kashihara (榎原 潤) https://note.com/junkashihara 榎原 潤 (Jun KASHIHARA) のホームページ https://junkashihara.wixsite.com/psychology 榎原 潤 (Jun KASHIHARA) - マイポータル - researchmap https://researchmap.jp/junkashihara

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
	オーストラリア	University of Melbourne	RMIT University	
米国	Boston University			